

安曇野における滞在型観光の 新しい形態と環境保全

住 吉 広 行

1. はじめに

この論文は、2004年9月に松本大学で行われた、日本オペレーションズ・リサーチ学会「食糧・環境問題とOR」研究部会（平成16年度第3回研究集会）で講演した「安曇野における滞在型グリーンツーリズムの探求」にもとづいて、その内容を再構成し、新しい視点を付け加えたものである。

この論文における主要テーマは、他ではない安曇野という特定の地をフィールドとして、新しいタイプの観光について考えてみることである¹⁾。それは安曇野がすでに観光地として日本全国にその名が知れ渡っているから、という理由だけからではない。安曇野にはまだ豊かな自然環境が保持されており、日本人の「心の故郷」としての景観が十分に残されている。しかしその一方で、全国的な開発の波や農業の衰退傾向とともに、緑豊かな田園風景や、北アルプスの麓に広がる清風が吹きぬける木陰のスペースが減少しつつあるという危機感を抱かせるようになってきている。この危機を何とか回避できないかという意識が、安曇野を例に取り上げたもう一つの理由になっている。

実際豊中市出身の私の住んでいた、幼かった頃の周囲の環境は、竹藪があり、小川の流れるにはめだかが泳ぎ、夏には蛍も飛び交い、田んぼではおたまじゃくし、かえるや蛇もいて、池にはザリガニがいるだけではなくとんぼもやってきて産卵している、こんな風景に囲まれたものだった。しかし、今やこのような

情景は一掃されてしまった。昔懐かしい道を現在辿ってみても、見るも無残に家ばかりが立ち並んでいる。大阪のベッドタウンとしての機能を担ってきたのだから仕方がないと言えばそれまでだ。しかしこの安曇野でも、このままでは豊中がそうってしまったように、いずれ緑の少ない、もう安曇野とは呼べない地域になってしまうのではないか。こうした恐怖感にも似た認識から、「どうすれば自然の豊かさを残しながら、そこに住む人々の経済的な生活を支えていく事が出来るのか」「自然と共生する人類の新しい生活のあり方と、自然を守ることや新しい経済システムの構築が強く関係しているのではないか」と、ぼんやりと考え始めるようになった。

しかし、自然の保護や環境の維持に関しては、必ずしも「観光だけしか研究対象がない」というわけではない。松本は、全国的にも日照時間が長いことでも良く知られており、例えば地球環境保全、地球温暖化を回避するという視点からは、太陽光発電、ミニ水車発電の利用、風力発電など自然エネルギーを取り入れた地域づくりも、これからの重要な課題であろう²⁾と思っている。この点については、最終章でごく簡単に触れてみたい。

本稿の構成は次のようになっている。2章で観光の新しい方向性、エコツーリズムやグリーンツーリズムについて考え、3章では安曇野を舞台に展開する滞在型グリーンツーリズムの内容について、学生との共同調査に基づいて極く簡単に紹介する。4章では、観光プラン作りや公共交通網の展開に関して、これまでのOR的手法が生かせることを示唆したい。最後に、食の安全性の確保とグリーンツーリズムの関連、さらには地球環境の保全と経済的發展を両立させることとの関連について、考察を試みたい。

2. 変化する観光スタイル——個性化とマス・ツーリズムの限界——

1) マス・ツーリズム

これまで観光といえば、物見遊山的なイメージを描き勝ちであった。観光バスに揺られて、観光スポットに到着すればガイドさんに誘導されて、予め組み

立てられたスケジュールに従って、時間的な強い制約のもとに忙しく動き回る。そして疲れ果てた挙句、バスの中では周囲の景色を楽しむ余裕もなく、居眠りをしながら、次のスポットでまた降ろされて、歩き回る……。

あたかも観光は、雑誌や本で紹介されたポイントを、「ああここがあの雑誌に載っていたあの場所なんだ」と納得をして帰っていくもの。そして帰ってから「私はあの有名な場所に行ったんだ、あの絵を見たんだ」ということだけが話題になる。このような観光のあり方は、全くなくなってしまったわけではないが、これに対して批判的に見たり、意義が感じられないと思ったり、そもそも全く望まない人も増加してきている。その代わりとして、個人や気の合った少人数グループによる「じっくり型の観光」が増えて来ているといえそうだ。

職場などでの団体旅行でよく見られた情景は、宿泊場所でも大広間の宴会場に通されて、わいわいと賑やかに“騒いでいる”。どこにいても同じなのだが、ただ場所が熱海温泉であったり、白浜温泉であったり、全国的にも名の知れた有名温泉であるだけ、といった“旅行”も多かったであろう。宿泊施設の側でもたいしたおもてなしをせずとも、立派な設備が装備され、食事や飲み物を用意しておけば、客の要望は十分に満たされていた。しかも、泊まった客は外へ出させず、建物の中でお土産など全て調達できるように囲い込んでしまう。その結果は、昔ながらの浴衣と丹前に身を包み、お土産屋さんを覗きながらぶらぶらと歩いている、このような温泉街の風情の喪失でもあった。

2) 新しい観光スタイルの台頭

これが今ではどうだろうか。バブルの崩壊とともに、金に任せてただ場所を移して、どこでやっても同じようなことをしている余裕はなくなった。このような状況は、熱海もいまやマンション街へと様変わりする傾向からも頷けるのではないだろうか。

観光客の目が肥え始めると、自分の趣味・興味にあわせた、オリジナルな観光をゆっくりとやってみたい、のんびりとした時間をすごしたいというように

安曇野における滞在型観光の新しい形態と環境保全

観光のスタイルが変化してくる。大分県の湯布院や熊本県の黒川温泉など、最近流行の観光地はおおよそ“熱海的なもの”を避ける方向で進んでいるといっても過言ではないであろう。

新しい方向の観光に必要な要素、受け入れられている要素は何であろうか。何か特別に巨大な人工的な象徴（いわゆる、はこもの）が必要なのではない。求められているのは、豊かな自然や落ち着いたたたずまいなど、心を和ませる仕掛けである。安曇野ではそれが、豊かな湧水であったり、長閑な田園風景であったり、木陰を通り抜ける涼風であったり、田んぼに広がるレンゲ畑であったり、秋の白い花咲くそば畑であったりする。また、溪流に入れば川魚と格闘してみるのも醍醐味かもしれない、見えている魚が釣れないのだから。このように考えてみると、安曇野はこれからの新しい観光をリードする資格を十分に持ち合わせていると断言できる。

そうだとすれば、この貴重な今ある要素を壊さずに守り通すことが、観光地安曇野を観光地足らしめる最大のポイントとなってくる。こうした方向の観光のあり方は、自然環境や地域の文化と人間が共生するエコ・ツーリズムと呼ばれたり³⁾、農村部での緑（畑や林のイメージ）を基調にした体験型で、しかも都市と農村の交流を図るグリーン・ツーリズム等と呼ばれているのである⁴⁾。

3) 観光を構成する3つの機能

マス・ツーリズムから個性尊重型のエコ・ツーリズムあるいはグリーン・ツーリズムへの変換、これが成熟した日本社会で見られる、観光の大きな流れとなって来つつある。安曇野における新しい観光の具体的な姿を考察する前に、一般に観光を成り立たせている機能にはどのようなものがあるかを、観光支援、観光舞台、観光組織化の三つの視点で考えてみよう⁵⁾。

a) 観光支援機能

観光の基本となっている「日常世界から非日常の世界への移動」を実現させるための交通手段や、遠方において観光を続けるためにどうしても必要な宿泊

施設。これらは、人が観光を行う時にどうしても必要となってくるもので、「観光を続けることを支援する機能」と考えられる。

b) 観光舞台機能

実際に観光客が、その観光の目的としている内容は何だろうか。その土地に特徴的な、自然景観や歴史、文化などであろう。（中仙道の宿場町、松本城、美

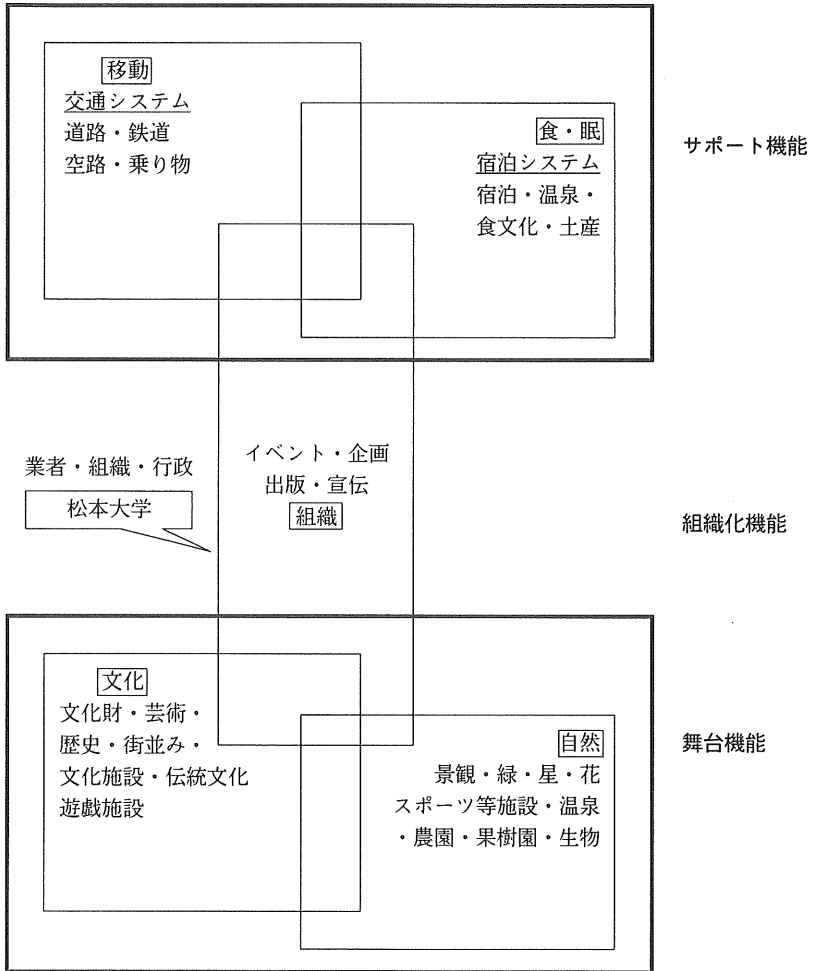


図1 観光にけるの三つの機能とその役割の相互関係

術館、美ヶ原高原、上高地、食文化としての蕎麦などを想定してみればわかるであろう。)これらは、観光客が役者だと考えれば、役者が演じる場所、すなわち「観光の舞台」ということになるだろう。たとえ舞台は上々であっても、役者が上手くなければ演劇は観衆に受けない。すなわち観光客の質も問われてくるのである。目の肥えた観光客は、良い役者に対応する。観光客が予め観光地の歴史や文化を予習して出かけるというのは、舞台装置を活かせるいい役者に、少しでも近づきたいという願望と考えてもよさそうである。

c) 組織化機能

支援機能と舞台機能が揃えば観光が成り立つかというところでもなさそうである。観光客と舞台とを結び付ける機能(これを「組織化機能」と呼んでいる)が必要である。ガイドブックであったり、観光地の紹介パンフレットであったり、相談システムであったりする。旅行会社もその大きなウエイトを占めているが、最近では自治体もイベントを主催するなど、先頭になって観光地の宣伝に努める場合も増えている。観光系の大学などが、地域と結び付いて、新しい観光資源の開発を試みたり、観光地の魅力を掘り起こしたりして、新しい観光のあり方を提言することも、組織化機能の一つと言えるであろう。

3つの機能の関係を示したものが図1である。松本大学も組織化機能の一端を担おうとする姿勢が図中⁵⁾に示されている。

3. 安曇野の観光資源と滞在型グリーン・ツーリズムの展開

さてこの章では、「観光の舞台としての安曇野」におけるグリーン・ツーリズムを具体的に考察する。まず最初に安曇野における観光資源を分類し、次にどのような安曇野観光プランが提案できるか、その可能性を考えてみたい。後者は、松商短期大学部で「特別研究」を履修した学生との調査活動に基づいて¹⁾いるが、ここでは紙面の関係上、その概要だけを簡単に紹介するにとどめる。

1) 安曇野の観光資源とその分類——自然と文化——

安曇野では、北アルプスの麓に広がった扇状地が展開し、爽やかな田園地帯が広がっている。豊かな自然環境に恵まれ、冬の厳しさも反映した、食文化を含む独自の文化が育まれている。萩原碌山、島木赤彦、窪田空穂、白井吉見、高橋節郎、鈴木真一、草間弥生などなど、芸術・文化に関わる人材も多数輩出している。このような文化的な土壌のうえに、多数の美術館や博物館が松本や安曇野に点在し、「安曇野アートライン」という組織もできている。

観光資源はどのように特徴付けられるのだろうか。これを次図2に、分類・表現してみた。観光資源は大きく分けて自然を対象とするものと文化を対象とするものに分かれている。自然の場合、自然を鑑賞するケースと、自然の中に

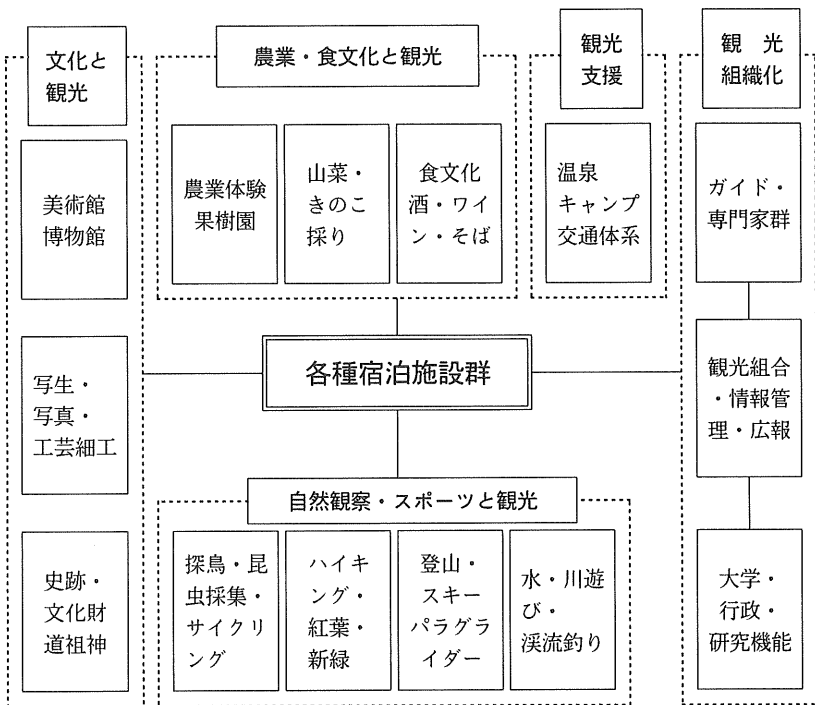


図2 安曇野の観光資源とツーリズムの展開

安曇野における滞在型観光の新しい形態と環境保全

溶け込んで自然の中で観光客自身が活動するケースとに分かれる。文化についても食に係るものと歴史や芸術的なパートに分けられそうである。

2) 具体的な安曇野観光とそのテーマ

a) 食文化・農業体験など

信州・安曇野で食を楽しもうとすると何が考えられるか。信州蕎麦を食べ歩くのも面白い。地元の方々でもそれぞれの口に合った虻貞筋を持っているようだ。本学学長を始め蕎麦を打てる人材も多く、蕎麦は地域に根付いている。

春先は豊富な山菜に恵まれ、取れたてを天ぷらにして、地酒で賞味するなど地元の人々の案内がなければ出来ない贅沢であろう。秋にはきのこ、長い冬のために用意された野沢菜も名物である。扇状地の上には果樹園も広がり、りんごやぶどうが栽培されている。桃、梨や栗、くるみなどお菓子の材料も事欠かない。

Vif 穂高という施設では、地元農家が収穫した作物が、地域内市場を形成しており、いつも新鮮野菜が買えるようになっている。観光客に向けてなのだろうが、食文化の継承も意図して、蕎麦打ち体験なども出来るようになっている。

池田町にある農家民宿「あぶらや」では、自分の畑で農業体験をさせたり、収穫物を利用して工芸細工を楽しませるなど、グリーン・ツーリズムを実践している。観光客が畑で収穫した新鮮野菜をその場で料理する。しかも地元の方々⁶⁾の伝統に従って。宿泊客のこうした経験は、究極の地産地消の運動になっているともいえる。さらに観光客とのつながりで、産地直送の安全食品を旬にあわせて供給することも行っている。こうした一連の活動は、農業の重要性を観光客などに認識させることにもなっており、結果として安曇野の農業を守ることにもつながっている。

b) 芸術と歴史・文化

松本城や旧開智学校、美術館や博物館（司法博物館、どんぼ玉美術館、浮世絵博物館、白井吉見文学館など）など歴史を感じさせたり、文化の香りを

漂わせる建物などが多数存在している。安曇野をサイクリングでもしながら、道祖神めぐりも兼ねて、のんびり回ってみるのも一つの趣向であろう。

多くの美術館・博物館が共同して、安価な「安曇野共通アート・パスポート」でも発行してくれれば、気分の赴くままに訪問する事ができるであろう。3年間くらい有効であれば、リピーターを獲得できる可能性もありそうに思える。

c) 自然と取り組む——スポーツ・芸術・生物——

①スポーツ

夏は登山、パラグライダー、川では溪流釣りやカヌー、湖では釣り、ボートなど、避暑を兼ねてにぎわっている。学生のクラブ合宿などでもよく利用されている。また、冬は、スキー、スノーボード、スケートなど、北海道と並んでウィンタースポーツのメッカとなっている。

②芸術

安曇野の景色の良さから、ゴールデンウィークや夏休みなど、写生をする人々でごった返している名所も多い。山や高原、高山植物、新緑に紅葉など、被写体に恵まれ写真撮影に訪れる観光客も後をたたない。畑や山の中で採集したラベンダーやつるなどの植物や樹木を利用した工芸細工も盛んである。こうした工房が安曇野には多く、体験コーナーが用意されている場合もある。

③生物

春から夏にかけて、ほたる、蝶やトンボ、それにクワガタムシやカブトムシなど子供達が憧れる昆虫もまだまだ豊富に棲息しており、バードウォッチングなども含めて生物を対象とするような観光も成り立っている。川に入れば沢蟹なども見られる。とくに趣味としている愛好家だけではなく、子供連れの家族などにも良い体験が出来る場所として、好評である。

d) 温泉

白骨温泉の不祥事はあったが、安曇野周辺には中房温泉があり、北部には大町温泉郷、松本近辺でも浅間温泉や美ヶ原温泉、扉温泉などなど温泉には事欠かない。穂高辺りでは、温泉を引く権利がついた別荘の販売などもなされてい

安曇野における滞在型観光の新しい形態と環境保全

る。例えば絵本美術館森のおうち（ここでは、美術館内で絵本のストーリーをもとにしたオリジナルな結婚式が行われている）が経営する宿泊施設でも温泉が利用できるので、その意外性に驚いたりもする。

3) 滞在型観光とその組織化

a) 安価な宿泊施設

安曇野の良さを味わうには、のんびり、ゆっくりがキー・ワードの一つになりそうであるから、時間に余裕のとれる滞在型のツーリズムが望まれる。この場合宿泊費が課題であるが、安価な（例えば1家族、素泊まり1泊あたり1万円程度）宿泊施設があれば、3～4泊の滞在型の観光にも手が届きそうである。先ほどの農家民宿「あぶらや」は確かにこの程度の値段になっている。

もしこれくらいゆったりとして安曇野に滞在できれば、上に述べたようなプランを組合せながら、しかもその多様性のために、家族連れでもそれぞれに楽しみを感じながら、思う存分“ほんもの”を楽しむことが出来よう。

b) 観光客同士・地域との交流

異なる施設の宿泊客同士を結び付けながら、共通の案内ガイドのもとでいくつもの家族が一緒になって、例えばきのこ狩りを楽しみ、その日の夜も収穫物を利用した夕食を共にする事も可能かもしれない。地元の人たちを介して、話に花が咲けば、思いがけない楽しい旅行に変わっている可能性もある。これもグリーン・ツーリズムを愛好する人達ならではの醍醐味であろう。

c) 組織機能——コンピュータネットワークと観光ガイド——

しかし問題は、このような偶然のめぐり合わせを組織できる機能をきちんと持っているかどうかである。フランスで行われているように、同業の組合の意思統一もできており、公的セクターからも支援されている組織が望まれる。宿泊客を結び付けるには、インターネットで結ばれた宿泊施設間の情報交換が行われる必要があるだろう。また、観光案内役の確保（少ない場合は養成も必要であろう）なども課題である。

安曇野でグリーン・ツーリズムを展開するには、観光客と宿泊施設、観光客とガイド役、観光客と観光スポット、あるいは観光客同士、の「結び付きの橋渡し」という、難しい問題に取り組む組織の立ち上げが¹⁾焦眉の課題となる。

4. 観光地の交通システム・探索と OR

1) 公共交通システムの整備と環境保全

公共交通網の充実、安曇野を排気ガスから守り、緑豊かな自然を満喫できる地域として残していくには、欠かすことができない。幹線を通る公共交通とその隙間を縫うものとして、徒歩（そのための遊歩道の整備）、レンタサイクリングシステム（そのための自転車専用道路の建設）の整備の他に、行き先別の10人くらいまでの、大型乗り合いマイクロバス型タクシーなどの、新しい交通システムの開発も重要になってくるであろう（図3参照）。

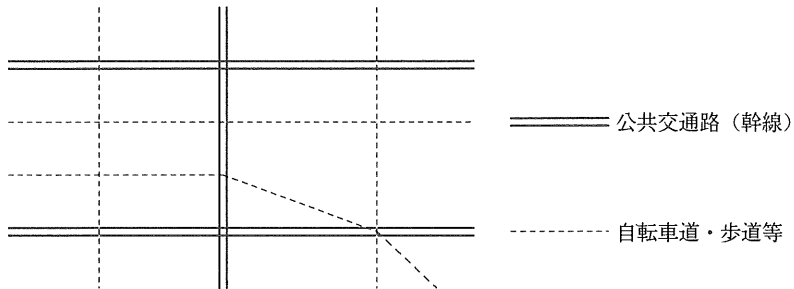


図3 公共交通システムとサイクリング道・歩道との組合せ

あまり長い時間を待つことなく、どこからでも乗れて、どこでも降りることの出来る、観光客の足となる安価な公共交通システムの充実。降りた場所から観光スポットまでの、レンタサイクリングなどの、移動補助手段などの充実。こうした交通システムが完備してくれば、排気ガスを出しながら観光客の横を通り過ぎる自家用車の群れを制御する事が可能になってくるであろう。環境保全も景観を維持する重要なファクターである。

安曇野における滞在型観光の新しい形態と環境保全

2) 観光スポットの周遊と OR

a) 道路網の整備と OR

観光スポットを想定しながら、それらを効率的に周遊していく、バス路線やサイクリングコースの設定などは、これまで開発してきた OR の手法が存分に生かせる場となるであろう。観光客の動線を想定しながら、コースを考える。住民の生活道路との棲み分けや、自動車道路と自転車道路の交差点の問題等、解決すべき課題も多いが、そのための調査活動が必要である。安曇野には、大型の自動車道路ではなく、環境に優しく観光客も安心して楽しめる自転車道や遊歩道の整備が緊急の課題のように思われる。

b) 安曇野観光モデルプランの設定と OR

観光地を巡るためのプランをつくるに当たっては、訪問すべき観光スポットの組合せ（内容面でのプラン）と、それらを例えば時間の面から効率的に結ぶルートの開発（移動面でのプラン）など、OR の手法が大いに役立つであろう。後者では、自転車利用やそれと公共交通とを組み合わせたプラン、前者では、世代に合った周遊プランなど、これから開発すべき課題は多い。

5. お わ り に

1) 自然環境・景観の保全とその指標

このような安曇野観光、グリーン・ツーリズムあるいはエコ・ツーリズムが成り立つためには、その景観の維持が大前提となる。豊かな自然環境、爽やかな緑の景観、これらがなくなれば安曇野は安曇野でなくなってしまう。

昆虫や鳥、植物などの豊富さが、自然環境の現状を知る良い指標になりそうだ。幸い小学生のころから蝶々の採集を趣味としてきた私は、これからはこのような目で安曇野の蝶を観察したいと思っている。

2) 食の安全性とグリーン・ツーリズム

ところで安曇野の場合、景観の維持は農業の振興と不可分に結び付いている。

農業で生活が出来ないようになれば、農家が土地を手放そうとしても何ら不思議ではない。こうした危険な状況を脱するためには、やはり農業が農業として成り立っていくような産業構造が必要である。これはまた、国民の食の安全性を確保するという視点⁶⁾からも、重要なポイントであろう。

グリーン・ツーリズム⁴⁾による都市と農村の交流は、生産者と消費者の交流をも意味し、上手く結び付けば産地直送の契約が成立する事もあるだろう。このような契約栽培は農業と緑の景観を守る事にもつながる。地域内市場の拡大とあわせて本格的な取組が待たれる。

3) 「地球益」最大化と環境の保護

生活に必要なものが一通り揃っている現在は、大量生産・大量消費・大量廃棄型の生活スタイルからの脱却には必然性があるように思われる。大量に生産しても、もうどんどんとは買わないからだ。製品の寿命も延びている。原料となる地球資源も有限であるとなると、資源を廃棄するのではなく何度も利用する、使えるものは何度も使うなど、必然的に循環型社会への転換が促されてくるであろう。

大量生産から大量廃棄につながる生活スタイルをどこまでも続けると、人類

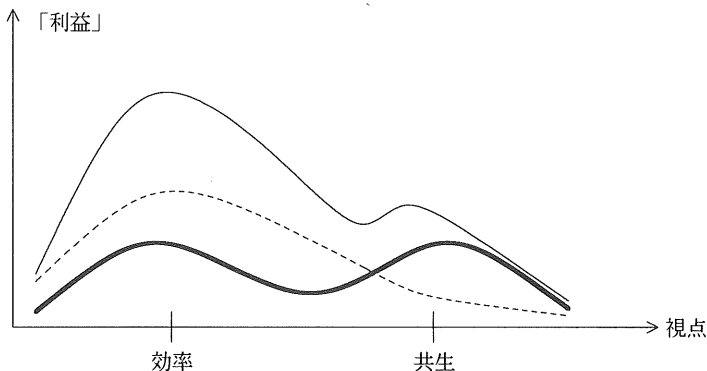


図4 「利益」を考える視点

安曇野における滞在型観光の新しい形態と環境保全

の生活基盤である地球そのものが破壊されてしまう可能性が認識されつつある。温暖化防止のための京都議定書が発効したのもその一例であろう。そうであるならば、「何をおいてもまず地球を守らなければ、人類の未来の展望は開けない」、このような岐路に立たされたとき、人類は物質的な豊かさから精神的な満足へと舵をとる可能性がある⁷⁾。これが観光ではエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムへの転換であろうと考えられる。

経済的視点で見れば、地球=∞を前提に、ある一部の国や人々の局所的利益の向上（効率至上）を採るか、地球=有限という前提に立ち、地球的規模での人類の大局的利益の極大化を考えるか（共生の視点）の分かれ道かもしれない²⁾。この辺りの事情を図4では、負の遺産を差し引いた「利益」で考えている。

真の利益（一）＝見かけの利益（一）－環境破壊等の負の遺産（--）

これまでどちらかというわれわれは負の遺産を、将来の技術発展にその解決を委ね、忘れていたのではないか。市民の目が肥え本物志向になると、「企業の利益」と「地球の利益」とを一致させよう（見方を変えれば、温暖化など地球への負の遺産を減らそう）と努力する企業こそが、21世紀の将来に生き残れるようになるのではないか⁷⁾。ちょうどマス・ツーリズムがエコ・ツーリズムやグリーン・ツーリズムに取って代わられつつあるように。

謝 辞

研究部会で発表する機会を与えて下さった石井博昭教授や、本論集への公表を勧めて下さった塩出省吾教授に感謝致します。グリーン・ツーリズムのプラン作りは、松商短大部で私の特別研究を受講した学生との野外調査（アウトキャンパス・スタディと称している）の成果であり、その活動を労いたい。

参 考 文 献

- 1) 住吉広行編・著「信州の観光と松本大学」松本大学地域総合研究センター、

2004.12.

- 2) 住吉広行「松本大学の教育理念・教育手法と「地球経営と科学」の教育実践」, 地域総合研究第2号, 松本大学地域総合研究センター, pp.29-69, 2002.10.
- 3) 古川彰, 松田素二「観光と環境の社会学」新曜社, 2003.
- 4) 山崎光博, 小山善彦, 大島順子「グリーン・ツーリズム」家の光協会, 1993.
- 5) 住吉広行「観光をとらえる視点」松商学園短期大学論叢第52号, pp.79-112, 2002.3.
- 6) 二木季男「地産地消マーケティング」家の光協会, 2004.9.
- 7) 三橋規宏「環境再生と日本経済」岩波新書, 2004.12.